
ツツジ

黒江伊織

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ツツジ

【Nコード】

N6673U

【作者名】

黒江伊織

【あらすじ】

とある人間の自分が犯した事件への独白。

あの事件についてお知りにならいたいと？ううん、確かに僕はあの寺に火をつけた張本人ですが、実際のところ自分でもよく分からないのです。

まあ、わざわざここまで来ていただいた上にそうご熱心に尋ねられると話さなきゃいけないような気がするんですけれども……どこから話したものだか……

第一、あなたの望むような理由だの原因だのというものを僕ですらご説明しかねるんです。何？それでもいい。しかし、話してくれるまでは帰らない？

困ったもんですね。しかし、そこまでお知りになりたいとおっしゃられるのならすこしばかり話してみましようか。

あの事件が起きた当初、まだ犯人が分からない内に世間やマスコミは怨恨だの何だのと騒ぎ立てまして、やがて僕という青年——当時の話ですがね——が警察に御用となり、被害に遭った寺と何の関係もないことが分かりますと家庭や学校での不遇だのと囃し立てられました。

僕は僕で強面の警官に長々と取調室でドヤしつけられまして、お前は馬鹿だとかなんだとか兎や角責め立てられて、その上になんてこんな悪行をなしたのかと問い詰められていました。

僕なんかはあそこに火をつけた理由なんてその時まで微塵も考えたことなどなかったんですけれども、凄い剣幕で迫られてみるとやっぱり自分がなにか悪いことをしたのだと思ったのです。そうして馬鹿で思慮の浅い僕というものがちよつとした出来心——まあ、例えばムシヤクシヤしていただとかで——それとて理由にもならない理由なんです、そういったもので寺に火をつけたのだと思い始めた。

世間は世間の方で、そういった僕の供述にあれこれと理由をつけ

始める。知人が少なくて鬱屈した人間だとか、親が出鱈目な人間だったせいで僕は堪え性がない人間に育ったとか、あるいは精神を病んでいたのだとか、何となく納得してしまいそうなそれらしい理由を付けている。

裁判のくだりになりますと、世間なんかからはすっかり忘れられてしまっただけなんです。が今まで理由付けされたことが僕の頭の中にこびりついてしまっている。僕という馬鹿で不幸な人間がちょっとした出来心——とはいっても深層心理ではそれまで貯めこんだ欠陥の暴露のようなものなのかもしれませんが——で非常に悪いことをしてしまった。そしてこうやって法の下で裁かれようとしている。となるとなんだか反省しなくてはいけないと思えてきたのです。

僕は本当に馬鹿で他の人間たちが押し付けた理由をただただ信じてしまっているだけなのかもしれない。あるいは、彼らの言う理由が僕の心理の中にあるのに気がつかないだけかもしれない。とにかく先刻言った理由の数々が僕の頭の中にあつた事件の理由なのです。しかしあなたの顔はご不満そうですね？僕もそうなのです。あれから随分と時間が経ちましたのに釈然とする理由が、実のところさっぱり分からないのです。

うん？あの日のことを話してくれですって？何度も人に話したことですし、僕自身も数えきれないほど思い返したんですが——はあ、確かに人に話していると偶然何か思い当たることが出てくるかもしれないけれど——まあ、他に急ぎの用事があるわけじゃないので良いでしょう。

あれは——僕があのお寺に火をつけたのはいつでしたかねえ。馬鹿に暑い日だったことを覚えています。そう、馬鹿に暑くて頭が一寸やられていたのかもしれない。まだ夏じゃなかったのですけれど、何故だかその日は格別に暑くてですね、意識が朦朧としていたんだ。

それでもって前日まで忙しいことが続いていたものだから僕はもう

くたくたでしてね。余計にふらふらとしていたんだ。

なんでそんな時に家で休んでいないで外出して家から遠くの寺に行ったかという、その時は人間に会いたくない気分だったんです。家にいると親と顔を合わせなければならぬし、町に出たってあそこはそんなに大きくないところですから見知った顔がウジャウジャいる。

そこに来るとあの寺というのは一寸不気味なところはあるけれど人が寄り付かないということに掛けては一等地でしてね。僕はたまに一人になりたい気分の時にあそこへこっそりと出かけるのが習慣になっていたんです。

その日はなんで一人になりたかったかという、朝っぱらから両親がつまらぬことで喧嘩をおっ始めましてね。家の中の空気がピリピリして剣呑だったから僕は知り合いと約束があると偽って家を抜けだしたんです。

ナントカ抜けだしたまでは良かったものの、先刻言ったとおり外は馬鹿みたいに暑いものだから僕は寺に辿りつくまでにヘトヘトになってしまったんです。そのふらついた頭で寺に着くとですね、寺の周りには一面のツツジが満開になっていたんですよ。

僕はどこか木陰を探すのも忘れてその花に魅入ってしまった。今思えばそれが全ての元凶だったのかもしれないですけど。

そのツツジの花は一寸色褪せた赤で僕は普段特別目につくようなことはなかったんです。ところがその日は頭が暑さでやられていたのかそのくすんだ赤が毒々しい蛍光色の赤や紫に見えたんです。それでもってツツジの花びらがチロチロと燃える炎のように見えましてね。あの花びらの端っこのほうが炎の先っぽみたいに見えましてね。僕がふらついていたのか風が吹いてツツジを動かしたのかはわからないですけどユラユラ揺れている姿なんかはまさに一面に広がる炎でした。

そうして、そのツツジに包まれた先にあの寺がありました。僕目はあの毒々しい蛍光色の炎が段々と寺を包む様子を想像し始めま

して、あれを本当に燃やしたら綺麗なんだろうなあってふと思ったんです。

そうしたら何処かで怒鳴り声が聞こえたんです。僕は平生から人間の怒っている声が大嫌いでした、思わずビクッと身を屈めました。何せ朝っぱらから怒声の飛び交う家からわざわざ嘘をついて抜けだしてきたんですからね。

ところが辺りを見回すと誰もいない。今思ってもあの声は僕の幻聴だったのか、それとも誰かのものだったのか判然としません。

僕は心を落ち着けて何だと思ってまた寺の方を見たんですが、ツジは先刻と違ってただ色褪せた赤なだけなんです。満開に咲き誇ってはいるものの、味気ない色です。先程のように幻惑的な色が滲み出して来るわけでもない。僕はカラー写真の世界から白黒写真の世界に拉致されたかのように酷く色彩に欠けた世界を味わう羽目になったのです。

そこで僕の頭の中にいつそ寺を焼けばあの美しさが戻ってくるんじゃないか、あるいは先刻よりもっと綺麗な景色が見えるんじゃないかと思っただけです。

今になって思い返せば物凄く馬鹿げた理由ですが、その時はそれが至上命題のように思えたんです。

もっともそれは暑さに頭をやられていたせいかもしれない。そこで怒声を聞いて幻聴とも分からずに、余計に頭をやられているにもかかわらずいつも通りの色褪せた景色が見えたので不意に冷静になった気持ちがあったのかもしれない。

兎も角、僕はその時思っただけを実行してしまったんです。住職は丁度その時寺にいないようで人氣が無かった。その上、あれは木造でしたから一寸燃えそうな物に火をつければそれはそれは簡単に燃え始めましてね。

僕は炎が広がって寺が燃え滓になる一部始終を見ていました。途中から近隣の人達が気付いて消防署の人間が来て懸命に消火作業をしていましたけれど、何せ燃えやすい建物なものだから、太い柱や

梁が炭になって残った他は殆ど燃えてしまいました。

僕は寺が燃えている様子をずうっと見ていたけれど、なんだかがっかりしてしまいました。何せ日差しが強いせいで炎がよく見えなかったんです。そのくせ煙だけはモクモクと出て来て余計に台無しだなあ、とその時はそんなことを思っていました。

その後は普段と変わらず家に帰って暮らしていたのですが警察の調べが進んでも火事の野次馬の中で僕が怪しいということになりました。取り調べの手が及ぶことになりました。

後から知ったのですが放火犯というのは自分が火をつけたのを見に行く習性があるらしいのです。それでもって、僕のところへ警官が押し入ってきました。最初は穏便な問答だったので僕はのらりくらりと生返事をしていたんですがそのうち彼らが語気を荒らげてお前がやったんだろうとばかりに脅しはじめましてね。これはどうも逃れようがないし悪足掻きをするよりはお縄についた方が楽だと思っていましたね。その後のことはあなたのご存知のとおりです。

アハハ……そんなワケの分からない放火犯がこんなところにいるわけ無いって？ 第一、まだ塀の中にいるはずだっておっしゃるんですか？ いやね、僕はあそこでは模範囚だったんで早く出れたんです。いえいえ、お手間を取らせて申し訳ございません。こんな話をお聞かせしてしまつてね。人目を避ける生活をしていたら、ふと寂しくなることがあるんですよ。

自分から恩着せがましく話しかけてきてそんな狂った話を聞かされたらたまらない？ そんなに怒らなくなつていいじゃないですか。悪気があったわけじゃないんですよ。ああ、行つてしまわれた……やっぱり怒鳴り声は嫌なもんだなあ……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6673u/>

ツツジ

2011年7月7日03時28分発行